

Ⅱ. 分 析 編

1. 小学校調査結果の分析

(1) 第一次報告書に基づく再分析

小学校調査で用いた調査票は、①キャリア教育の実施状況と管理職の意識調査（学校調査）、②学級担任の意識調査（学級担任調査）、③在校生の意識調査（児童調査）、④在校生の保護者の意識調査（保護者調査）の四つである。

第一次報告書においては、主として各調査票における個別の設問への回答に焦点を絞り、それぞれの結果を整理して具体的に示した。ここでは、今後のキャリア教育の更なる推進・充実のために特に重要な側面に改めて注目し、調査票間を横断的に捉え、結果の再分析を試みる。

はじめに、小学校調査の再分析に当たって設定したテーマとその設定理由を述べる。

テーマ1 学校での学習と自分の将来との関係

平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」は、子供たちの課題を指摘する中で、「学校での学習に自分の将来との関係で意義が見いだせず、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しないといった状況が見られる」と述べ、「勤労観・職業観を育てるためのキャリア教育などを通じ、子供たちが自らの将来について夢やあこがれをもったり、学ぶ意義を認識したりすることが必要である」とキャリア教育への強い期待を示した。これを受け、小学校におけるキャリア教育の実践と学習意欲の関連について分析することを通して、現状を明らかにするとともに、今後の方向性について考察する。

テーマ2 キャリア・カウンセリング

第一次報告書において、小学校におけるキャリア・カウンセリングの実践が中学校・高等学校に比べて著しく低調であることが明らかとなった。よってここでは、結果の再分析を通して、一人一人の小学校教員が、キャリア発達を促す個別支援としてキャリア・カウンセリングを正しく捉え、その実践に対する前向きな姿勢をもつことが不可欠であることを示す。

テーマ3 キャリア教育における評価

今日、全ての教育活動において、目標を明確に設定し、成果を客観的に検証し、そこで明らかになった課題等をフィードバックし、新たな取組に反映させるPDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルの確立が求められている。しかし、第一次報告書において指摘したとおり、特に小学校においては、キャリア教育実践の評価をめぐる必要性・重要性の認識が低く、その方法について不安を抱える教員が多い傾向が強く見られる。これを踏まえ、評価をめぐる現状を明らかにするとともに今後の方向性について考察する。

テーマ1 学校での学習と自分の将来との関係

約3割の学校管理職、担任がキャリア教育の実践により学習意欲の向上を実感
キャリア教育を通して子供たちに学校での学習の意義と将来の関係についての
理解を深めさせましょう。

- 多くの子供たちが、今、学校で学習していることが、自分が大人になったときに役立つことを学んできている。
- ところが、学ぶことの意義について、ふだんの生活の中でいつもそのことを意識している児童は少ない。
- 学ぶことの意義について、重点をおいて指導している教員も、あまり多くない。
- 多くの保護者は学ぶことの意義について、学校において重点をおいて指導してほしいと感じている。
- 3割弱ではあるが、学校管理職、担任はキャリア教育の実践によって学習に対する意欲が高まっていると感じている。
- この教育の今後の更なる充実が、学校での学習の意義を自分の将来との関係において見出すことにつながり、学習に対する意欲を一層高めていくことにつながるであろう。

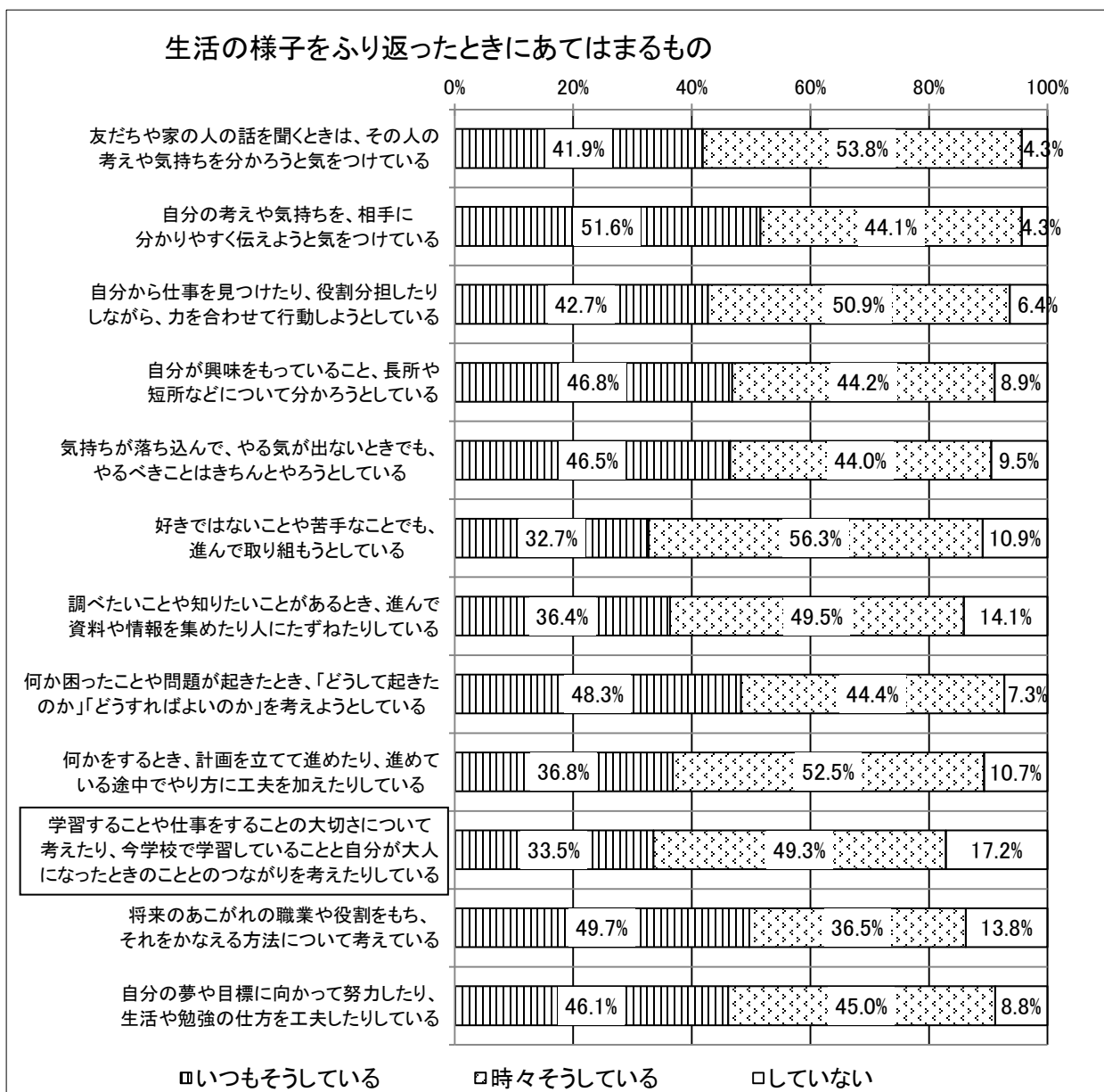
① 子供たちの「学ぶことの意義」に対する意識

学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させ、学ぶ意欲を向上させることは、キャリア教育の大切な役割の一つである。

児童に対する設問「学校の生活や学習の中で、あなたはこれまでどのようなことを学んできましたか」*¹では「今学校で学習していることが、自分が大人になったときの仕事や生活で役立つこと」73.0%と、多くの児童が学校で学ぶことの意義について、自分で気づいたり、教えられてきたりしたと回答している。

ところが、同じく児童に対する設問「あなたのふだんの生活(授業中や放課後、家庭での生活)について、あてはまるものを選んでください」*²では、「学習することや仕事をするものの大切さについて考えたり、今学校で学習していることと自分が大人になったときのこととのつながりを考えたりしている」33.5%であり、これは他項目と比較して、2番目に少なくなっている。学ぶことの意義について理解はしているものの、そのことをいつも意識して学習に取り組んでいる児童は決して多くない現状を見て取ることができる。

【図 1】生活の様子を振り返ったときにあてはまるもの（児童調査）

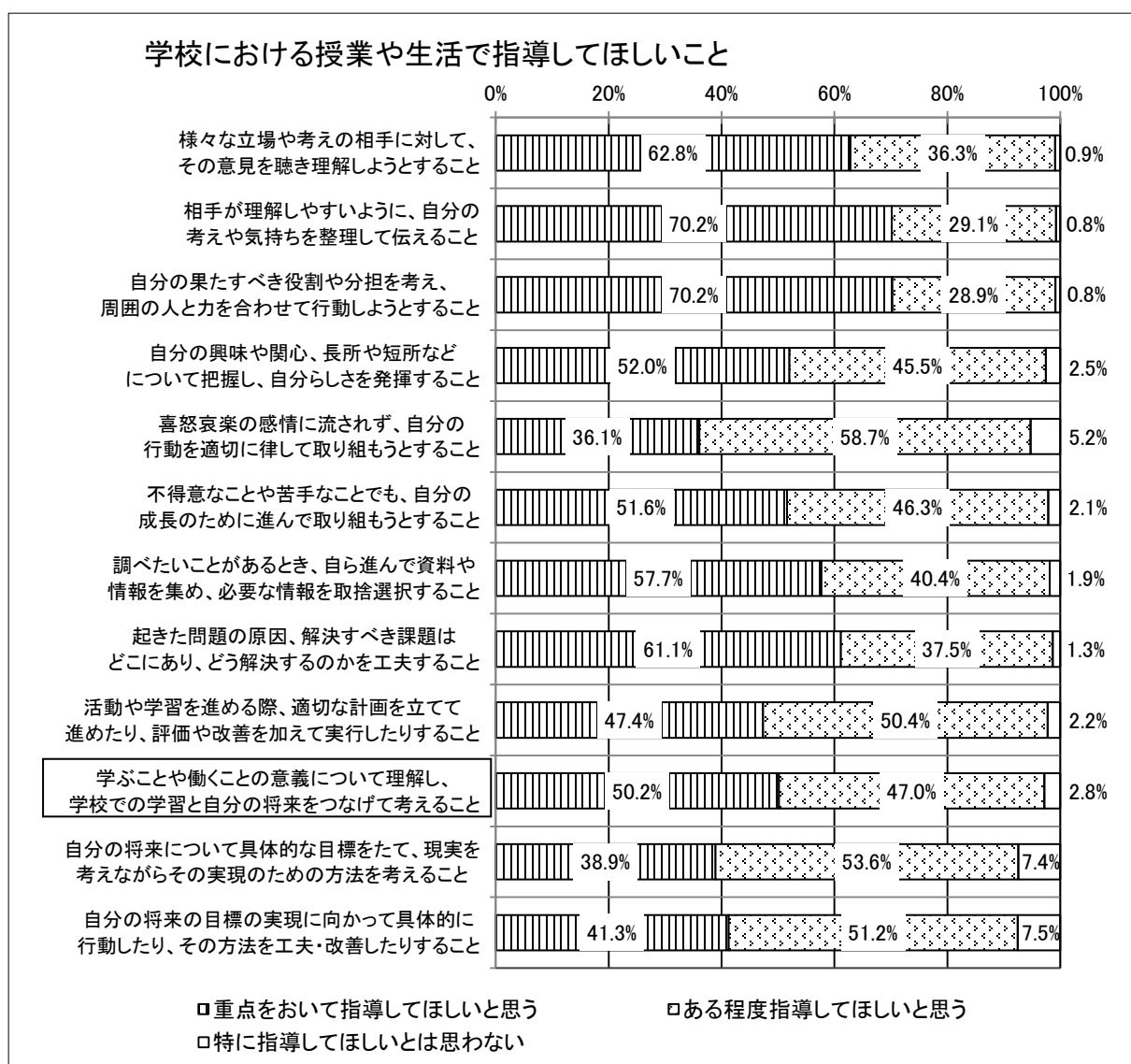


② 管理職・教員・保護者の「学ぶことの意義」に対する意識

では、学ぶことの意義に対する学校（管理職）や教員、保護者の意識はどうか。

学校に対する設問「貴校が平成 24 年度のキャリア教育の計画を立てる上で、重視したことがらは何ですか」*³では、「現在の学びと将来の進路との関連を児童に意識付けること」は 31.8%であり、担任に対する設問「あなたの学級でキャリア教育を行う上で、特にどのようなことに重点をおいて指導していますか」*⁴では、「学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」が 31.6%と、いずれも他項目と比較すると少ない。キャリア教育を実施する中で、学ぶことの意義に重点をおいて指導している学校、教員が決して多くない現状がわかる。

【図2】学校における授業や生活で指導してほしいこと（保護者調査）



しかし、保護者に対する設問「あなたのお子さんに、学校における授業や生活で、以下のことがらについて、どの程度指導してほしいですか」*⁵では、「学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」が97.2%（重点をおいて指導してほしい、ある程度指導してほしいの合計値）であり、他項目と比較しても低くない。保護者は、学校が学ぶことの意義について指導することに期待しているといえる。

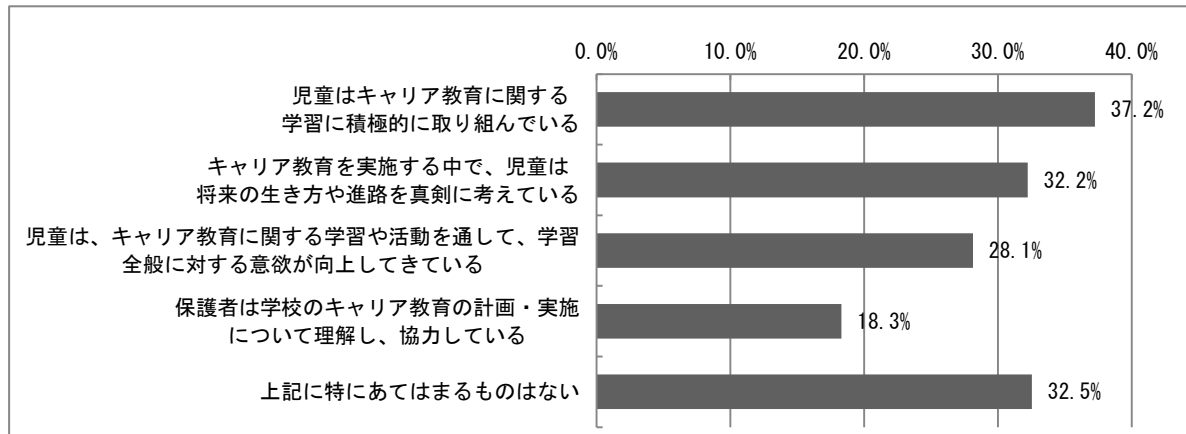
③ 教員のキャリア教育を通じた学習意欲向上への手応え

ところで、キャリア教育を通して、学習意欲が向上していることを感じている学校、教員はどの程度いるのか。

学校に対する設問「貴校におけるキャリア教育の現状について、全校的な立場からそのとおりである、と思うものを全て選んでください」*⁶では、「キャリア教育の実践によって、学習全般に対する児童の意欲が向上してきている」が24.2%

であり、担任に対する設問「あなたの学級あるいは学年における、キャリア教育の計画・実施に関する児童や保護者の現状について、そのとおりである、と思うものを全て選んで下さい」*7では、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」は28.1%である。いずれも3割弱ではあるが、キャリア教育を通して、学習意欲が向上してきていることを、学校や教員は確かに感じている。

【図3】キャリア教育の計画・実施に関する児童や保護者の現状（学級担任調査）



④ 今後の方向性

国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2011）の結果は、日本の中学生が数学・理科の大切さや意義を実感しておらず、国際的にみても著しく低い水準であることを示している。小学生の結果を見ると、算数や理科を楽しい、好きだと感じている子供たちの割合は高いものの、参加国・地域の平均には至っていない。小学生のうちから楽しさ等を基盤にしつつ、学ぶことの意義を子供たちに気づかせていくことは国全体の喫緊の課題であろう。

新しい学習指導要領においても保護者も、キャリア教育を通じた学習意欲の向上に強い期待を寄せている。この教育の推進に当たって、特に小学校教員はキャリア教育の充実が学習意欲の向上につながる（小学校（3）P40 参照）ことを理解し、学ぶことの意義を子供たちに指導していく、あるいは気づかせていくことを、重視していくことが大切であろう。

参考：第一次報告書における参照データ

| | | | |
|----|------|------------|-------|
| *1 | P96 | 小学校・児童調査 | 問7 |
| *2 | P94 | 小学校・児童調査 | 問5 |
| *3 | P60 | 小学校・学校調査 | 問3(4) |
| *4 | P85 | 小学校・学級担任調査 | 問5 |
| *5 | P106 | 小学校・保護者調査 | 問6 |
| *6 | P72 | 小学校・学校調査 | 問12 |
| *7 | P84 | 小学校・学級担任調査 | 問4 |

テーマ2 キャリア・カウンセリング

小学校におけるキャリア・カウンセリングの実施率は4.7%

小学校のキャリア教育でこそ、自立的に生きていけるよう支援するキャリア・カウンセリングを充実させましょう。

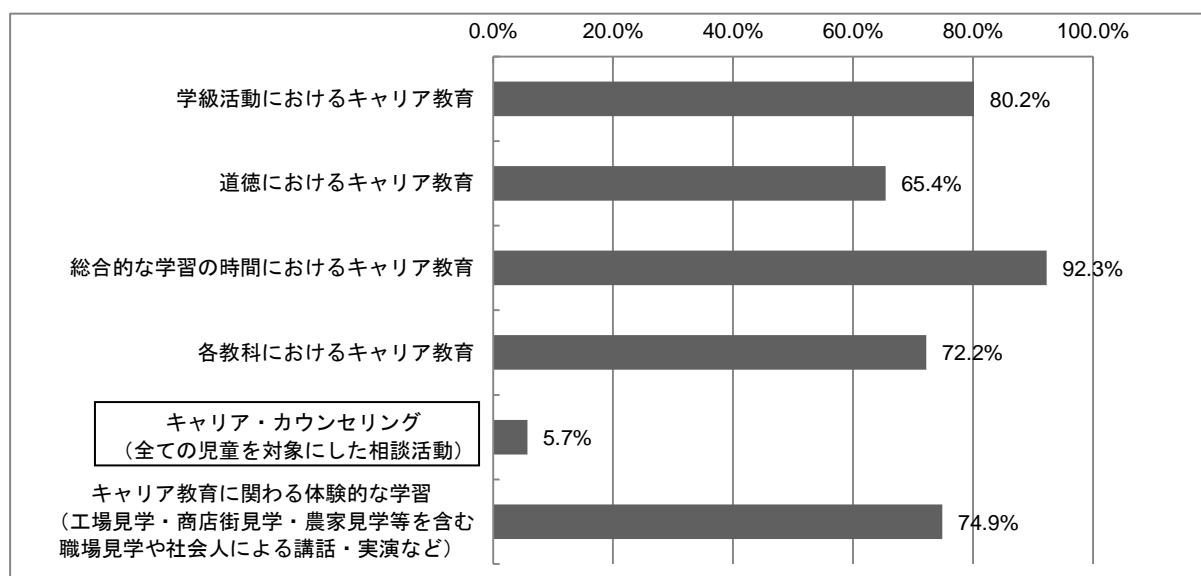
- 小学校のキャリア教育においては、キャリア・カウンセリングが計画に位置付けられておらず、指導すべき内容としての認識度も低い。
- 学校としては「教育相談、キャリア・カウンセリング等」の研修会への派遣を進めつつある。担任も関心を示す傾向にある。
- 担任は、キャリア・カウンセリングの方法や内容に困惑し、小学校段階から行うキャリア・カウンセリングの有用性や必要性を理解できていない。
- 体験活動や相談活動を上手に生かし、「自分を理解する学習」としてキャリア・カウンセリングを充実させていく必要がある。

① 年間計画におけるキャリア・カウンセリングの重要度

学校調査における「年間指導計画の内容」*¹をみると「キャリア・カウンセリング（全ての児童を対象にした相談活動）」の割合は5.7%と極めて低い。また、同じく「キャリア教育の計画を立てる上で重視したこと」*²における「キャリア・カウンセリングを取り入れること」の割合も2.2%と極めて低い。

このような調査結果から、小学校の教育現場では、キャリア教育の計画においてキャリア・カウンセリングは指導すべき内容としての認識が薄いといえる。

【図1】年間指導計画の内容（学校調査）



② 研修会内容にみるキャリア・カウンセリングのとらえ方

さらに、学校に対する設問「今年度、貴校で実施した(実施予定を含む)研修会の内容について、あてはまるもの全てを選んでください」*³において「キャリア・カウンセリングの実践に関する研修」は2.7%とやはり低い。しかし「今年度の研修会などへの教職員の派遣状況」*⁴では、予定を含んでいるものの「教育相談、キャリア・カウンセリング等に関する研修会」が38.4%と高くなっている。

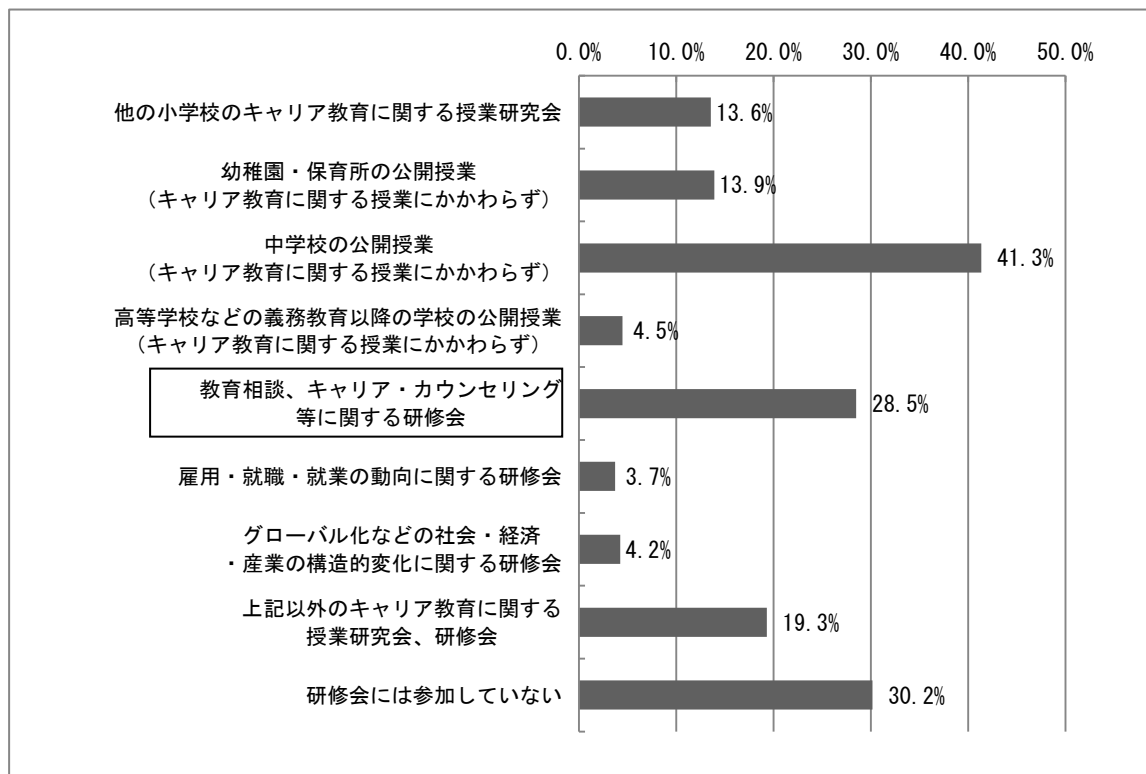
このことから、学校としてはキャリア教育推進においてキャリア・カウンセリングの理解が進んでいないことを課題としてとらえ、研修会への派遣を進めている現状がうかがえる。

③ 担任の意識とキャリア・カウンセリングの実施状況

では、担任の意識や実践状況はどうか。

担任に対する設問「今年度、あなたが参加した(参加予定がある)校内研修会を全て選んでください」*⁵では、予定も含んでいるが、「キャリア・カウンセリング(全ての児童を対象にした相談活動)の実践に関する研修」は4.5%と低い。しかし、「学校外における研修等の参加状況(平成20年度から5年間)」*⁶に見られるように過去5年間にさかのぼってたずねると「教育相談、キャリア・カウンセリング等に関する研修会」が28.5%と中学校の公開授業の41.3%に次いで高くなっている。

【図2】学校外における研修等への参加状況(平成20年度から5年間)(学級担任調査)

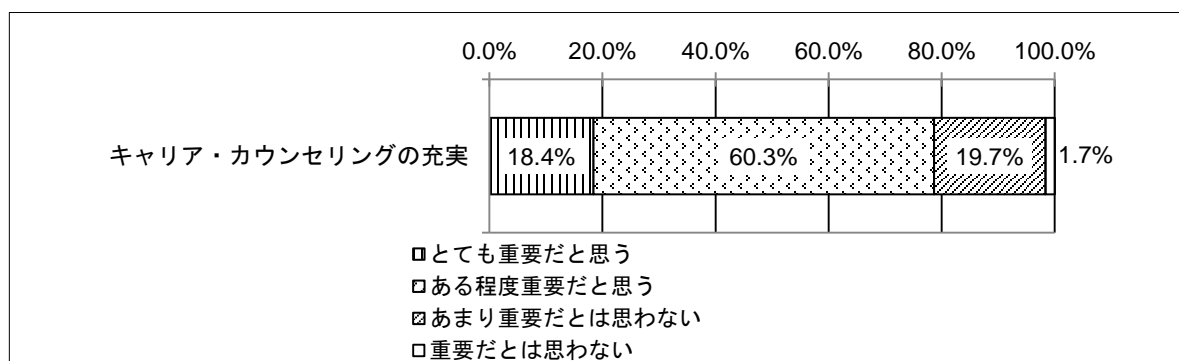


この結果は、回答項目の内容に「教育相談」とあるので、その理解がキャリア発達を促すための教育相談と考えて設問を作成した出題側と文字どおり教育相談は全て含むととらえた回答側の認識のずれもややあるものとも推測されるが、数値＝「担任の意識」と素直に読み取れば、担任の意識は、キャリア・カウンセリングに対して関心を示す傾向にあるといえる。

では、実際にキャリア・カウンセリングはどのくらい実施されているのか。

担任への設問「あなたの学級あるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施の現状についておたずねします」*7で実施の現況をみると、「キャリア・カウンセリングを実施している」は4.7%と設問項目の中では一番低い。その要因は、担任への設問「学級のキャリア教育について、あなた自身が困ったり悩んだりしていることについておたずねします」*8で担任自身が、「キャリア・カウンセリングの内容・方法がわからない」に37.4%と高い割合で回答していること、また同じく担任への設問「学級でキャリア教育を適切に行っていく上で、現状から見て、今後どのようなことが重要になると思いますか」*9では、「キャリア・カウンセリングの充実」における回答で、「あまり重要だとは思わない」、「重要だとは思わない」とした回答が合計で21.4%あり、他の項目に比べて高いことから、キャリア・カウンセリングのよさや必要性が理解されていないとともに、その方法がわからないことによるものだと考えられる。

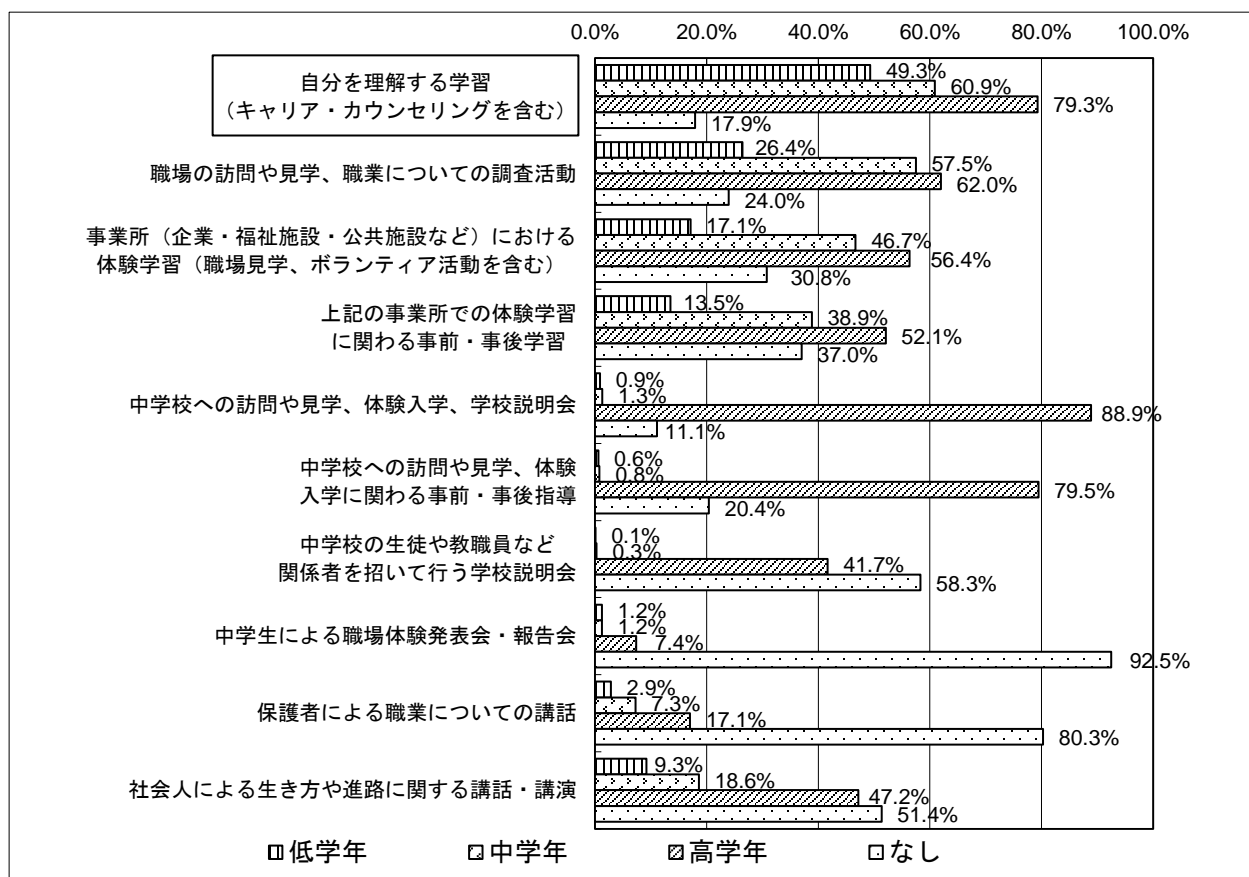
【図3】キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思うこと(学級担任調査)



④ キャリア教育の学習内容とキャリア・カウンセリングの可能性

そこで課題解決の糸口として注目すべきは学校調査における「キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況」*10の回答である。「自分を理解する学習(キャリア・カウンセリングを含む)」の割合は低学年49.3%、中学年60.9%、高学年79.3%と高い割合を占めている。キャリア・カウンセリングの内容は、小学校段階では自分を理解すること、自分の得意を見つけること、よさについて理解すること、自分に自信をもつこと等全て含んでいる。このことが理解されれば、今まで小学校段階で行われてきた教育活動の中での、体験活動や相談活動における個別支援を、キャリア・カウンセリングと結び付け位置付けていくことができるであろう。

【図4】キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況（学校調査）



⑤ 今後の方向性

キャリア・カウンセリングは一人一人の児童生徒とのコミュニケーションを通して、新たな環境への移行や未経験の学習課題への取組の際に生ずる不安の解消を図ると同時に、新たな環境や課題にスムーズに取り組めるようにする個別の支援である。小学校においてもキャリア・カウンセリングの必要性に対する認識を高め、さらに内容・方法については、研修会などを通して理解を深めていく必要がある。まず、各学校・教育委員会等における研修会を充実させ、キャリア・カウンセリングが小学校段階から不可欠な内容であることの周知を図る必要がある。

また、キャリア・カウンセリングを通して児童理解を深め、同時に、児童本人に自己を振り返らせる機会としても活用することによって、小学校でのキャリア教育における一人一人の評価も適切に行うことにつながる。評価には「子供の成長を支え、励ます」効果があることを踏まえつつキャリア・カウンセリングを実践し、子供一人一人にその子なりの成長を実感させ、自己肯定感を得させることによって、将来を見通し、前向きに進もうとする意欲を高めることができるようになるのではなかろうか。

参考：第一次報告書における参照データ

| | |
|-------------------------|-------------------------|
| *1 P58 小学校・学校調査 問3(2)② | *6 P81 小学校・学級担任調査 問1(4) |
| *2 P60 小学校・学校調査 問3(4) | *7 P83 小学校・学級担任調査 問3 |
| *3 P62 小学校・学校調査 問5 | *8 P86 小学校・学級担任調査 問6 |
| *4 P64 小学校・学校調査 問7 | *9 P87 小学校・学級担任調査 問7 |
| *5 P80 小学校・学級担任調査 問1(3) | *10 P70 小学校・学校調査 問11 |

テーマ3 キャリア教育における評価

担任の悩みの第3位は評価

評価の具体化に関する研修会を開催し、キャリア教育の指導改善につなげましょう。

- キャリア教育に対して、小学校担任が悩んだり困ったりしていることの第3位は「キャリア教育の評価」である。
- 具体的な評価の方法がわからないなどの理由により、小学校においてキャリア教育の成果についての評価は十分になされていない。
- キャリア教育の評価については、学校における研修が十分でなかったり、教員が研修会に参加したりする機会が少ない。
- キャリア教育の取組の改善につながる評価を行うことは、9割以上の学校が今後重要になると考えている。
- 今後、キャリア教育の評価が重要になる、と感じている教員は8割を超える。
- 具体的な評価の方法等について積極的に研修会を開催したり、職員を派遣したりすることによって、教員のキャリア教育の評価の必要性や重要性が再認識され、この教育の指導改善が一層推進されることが期待できる。

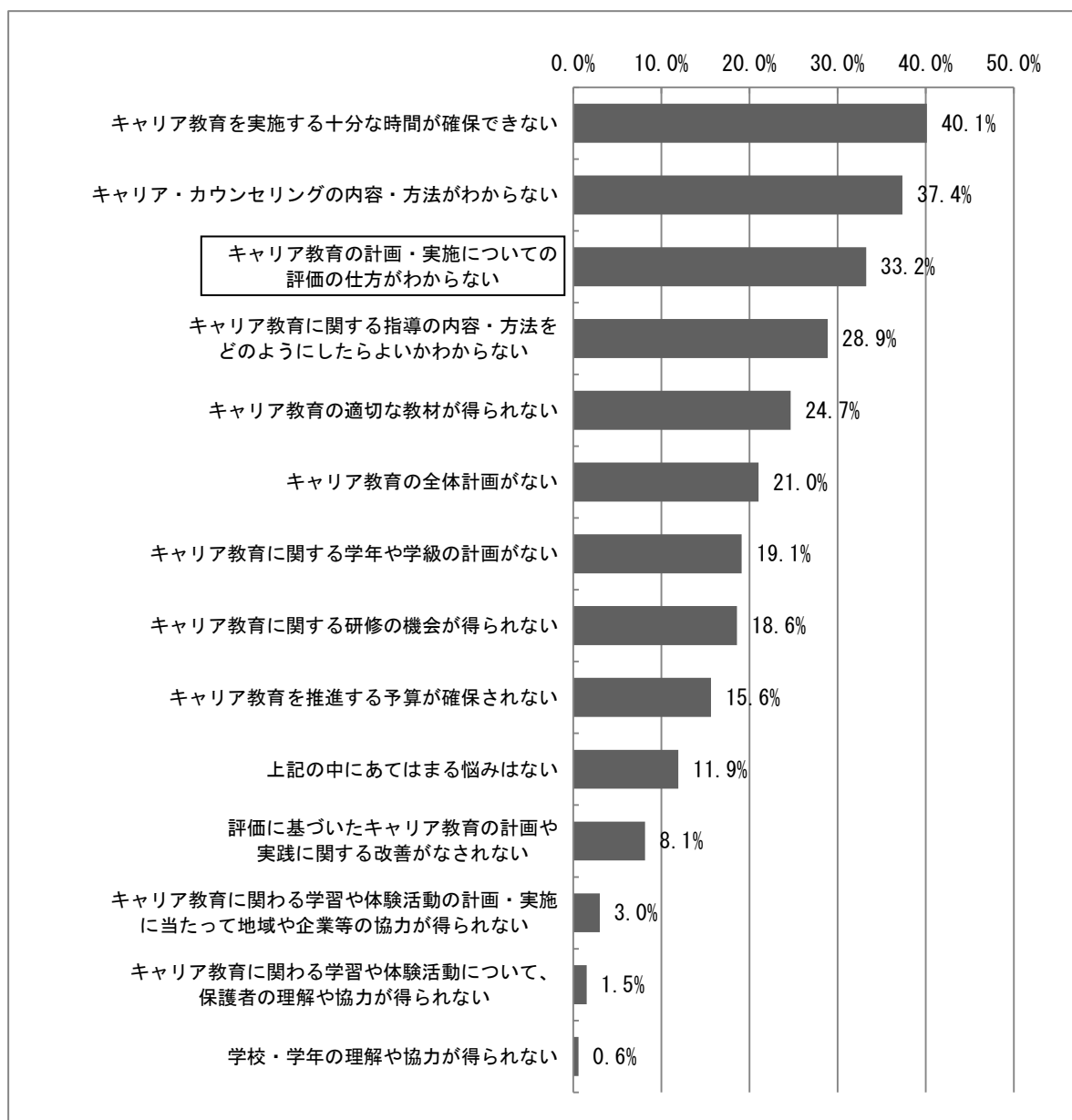
① キャリア教育の評価に対する認識

キャリア教育を通じた、児童生徒の変容をとらえる評価は、成長を多面的に確認することによって、キャリア教育の取組の効果を検証し、改善につなげる上で重要である。

この評価について、担任に対する設問「学級のキャリア教育について、あなた自身が困ったり悩んだりしていることについておたずねします」*¹では、「キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない」40.1%「キャリア・カウンセリングの内容・方法が分からない」37.4%に続いて「キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方が分からない」33.2%と、キャリア教育に対する悩みの第3位となっている。

一方、担任に対する設問「あなたの学級あるいは学年における、キャリア教育の計画・実施の現状についてそのとおりである、と思うものを全て選んでください」*²では、「キャリア教育の成果についての評価（アンケートやポートフォリオなど）を行っている」が12.2%と低くなっている。キャリア教育の評価に対する悩みが、実施状況の低さにつながっているものと推察される。

【図1】学級のキャリア教育について困ったり悩んだりしていること（学級担任調査）

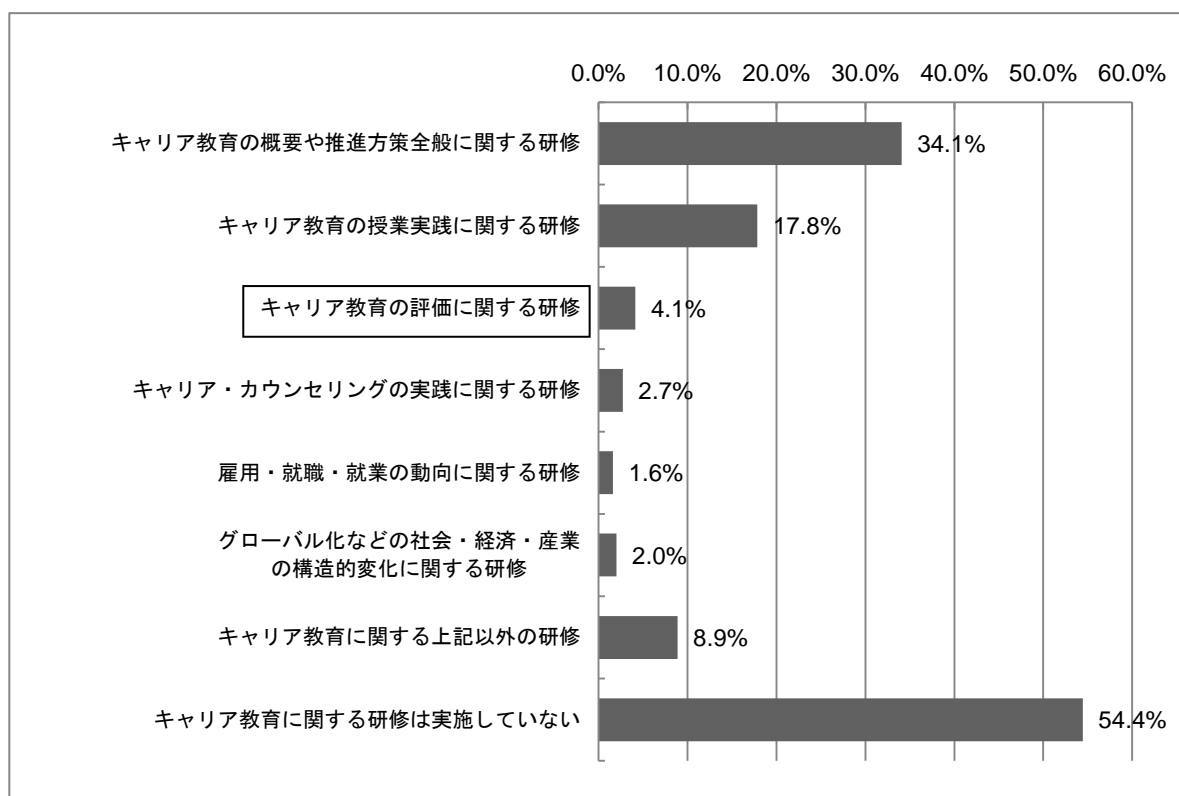


② キャリア教育の評価に関する研修会

このような教員の実態の中、キャリア教育の研修会の開催や、研修会の参加についてはどのような状況か。

学校に対する設問「今年度、貴校で実施した(実施予定も含む)研修会の内容について、あてはまるものを全て選んでください」*³では「キャリア教育の評価に関する研修」が4.1%であり、「キャリア教育の概要や推進方策全般に関する研修」の34.1%などと比較すると、極めて少ない。さらに担任に対する設問「今年度、あなたが参加した(参加予定がある)校内研修会を全て選んでください」*⁴では、「キャリア教育の評価に関する研修」は3.1%であり、こちらも「キャリア教育の概要や推進方策全般に関する研修」の21.3%などと比較すると少ない。

【図2】今年度実施した（実施予定を含む）研修会の内容（学校調査）



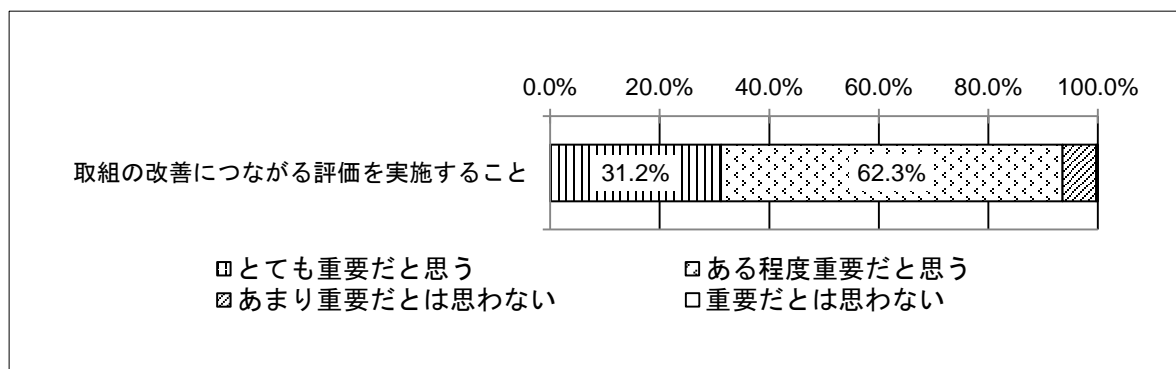
つまり、キャリア教育の評価について悩んでいるものの、その解決のために研修会を開催したり、研修会に参加したりすることは十分ではない状況をもてとることができる。

③ キャリア教育の評価の必要性や重要性に対する認識

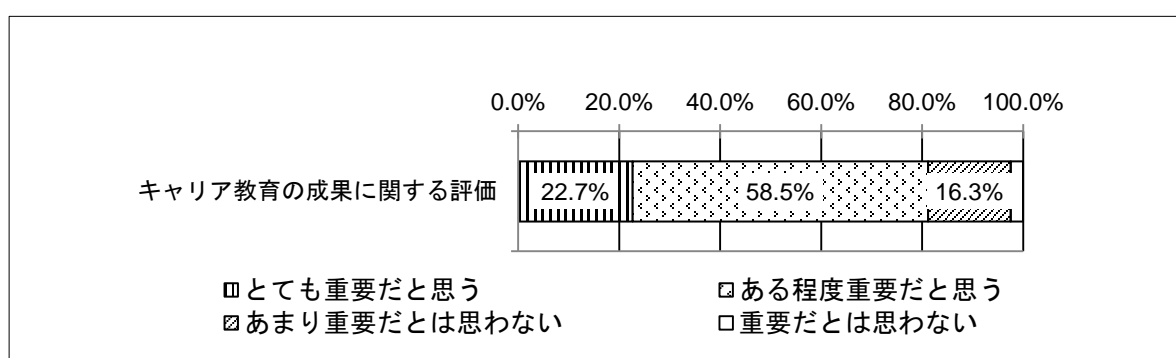
それでは、学校や教員はキャリア教育の評価に対して、必要性や重要性を感じていないのか。

学校に対する設問「貴校がキャリア教育を適切に行っていく上で、現状からみて、今後どのようなことが重要になると思いますか」*⁵では、「取組の改善につながる評価を実施すること」が93.5%（とても重要、ある程度重要の合計値、以下同様）であり、担任に対する設問「学級でキャリア教育を適切に行っていく上で、現状からみて、今後どのようなことが重要になると思いますか」*⁶では、「キャリア教育の成果に関する評価」が81.2%であり、いずれも決して低くない。学校や教員はキャリア教育の評価の必要性や重要性については、十分に認識しているといえる。

【図3】キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思うこと（学校調査）



【図4】キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思うこと（学級担任調査）



④ 今後の方向性

幾つかの県では、各学校のキャリア教育全体計画と年間指導計画、児童生徒自身がまとめたキャリア教育に関する学習の概要を共通書式で整えるポートフォリオの活用が県教育委員会の主導により進められている。また、仙台市では市が独自に整理した評価指標（関わる力、みつめる力、うごく力、みとおす力、いかす力）を設定し、各校における校内研修会において、目標の設定や評価に生かしている。このようにポートフォリオなど多様な資料を生かしたり、取組の目的に応じた「ものさし」を設定したりすることで、評価の具体的方法がみえてくるであろう。

多くの学校、教員がキャリア教育の評価に対する必要性・重要性を感じていることから、まずは各校において、評価に関する研修会を開催したり、外部の研修会に積極的に教員を派遣したりするなどし、教員の「悩み」を解決していくことが、キャリア教育の一層の推進と指導改善に結び付いていくものと期待される。

参考：第一次報告書における参照データ

| | | |
|----|-----|------------------|
| *1 | P86 | 小学校・学級担任調査 問6 |
| *2 | P83 | 小学校・学級担任調査 問3 |
| *3 | P62 | 小学校・学校調査 問5 |
| *4 | P80 | 小学校・学級担任調査 問1(3) |
| *5 | P75 | 小学校・学校調査 問14 |
| *6 | P87 | 小学校・学級担任調査 問7 |

(2) クロス集計の結果

分析結果のハイライト

- ① 全体計画は担任の取組を促進するという効果をもたらす。
- ② 体験活動は事前・事後活動を伴うことにより、児童の職業への意識を高める。
- ③ 担任の積極的な指導が児童の学習意欲を高める。
- ④ 親子の関わりが児童の基礎的・汎用的能力に影響する。家庭との連携が有効である。

〈分析によって得られた示唆〉

① 全体計画の重要性

1) 全体計画が担任の取組を促進する（学校調査、学級担任調査より）

担任が重点をおいて指導している内容を比較すると、全体計画のある学校の担任の方が「よく指導している」割合が高く、積極的に指導を行っている。

2) 重点目標が児童の意識やふだんの生活に影響する（学校調査、児童調査より）

ふだんの生活における児童の意識を比較すると、重点目標のある学校の児童の方が「いつもそうしている」割合が高く、概して前向きの姿勢である。

② 体験活動の効果

1) 体験活動が児童の職業への意識を高める（学校調査、児童調査より）

「将来、何かの職業について、働きたいと思う」という質問の回答を比較すると、体験活動を実施している学校の児童の方が、肯定する割合はより高い。

2) 事前・事後学習によって児童の職業への意識が高まる（学校調査、児童調査より）

体験活動そのものだけでなく、事前・事後学習を実施することによってこそ、児童の職業への意識が高まる。

③ 学習意欲向上の要因

1) 学習意欲向上のとらえ方（学校調査、学級担任調査、児童調査より）

管理職又は担任が学習意欲の向上を認識している学校の児童を「学習意欲の向上あり」(48.7%)、そうではない学校の児童を「学習意欲の向上なし」(51.3%)とした。

2) 担任の積極的な指導が児童の学習意欲を高める（学級担任調査より）

担任が重点をおいて指導している内容を比較すると、「学習意欲の向上あり」の方が「よく指導している」割合が高く、積極的に指導を行っている。

④ 親子の関わり

1) 親子の関わりが基礎的・汎用的能力に影響する（保護者調査、児童調査より）

基礎的・汎用的能力とも関連する、ふだんの生活における児童の意識は、親子で会話をしている程度によって違いがある。

2) 家庭との連携は教育効果を高めると期待される（保護者調査、児童調査より）

親子で会話をしている内容によっても児童の意識には違いが見られる。家庭との連携によって、キャリア教育の効果を高めることが期待される。

小学校調査結果に対するクロス集計に当たっては、キャリア教育推進の重要な課題として、「全体計画の重要性」、「体験活動の効果」、「学習意欲向上の要因」、「親子の関わり」という四つのテーマを検討した。

① 全体計画の重要性

各学校のキャリア教育の全体的な方針や計画を内外に示す全体計画は、キャリア教育を推進する上で重要な役割を果たす。それでは、全体計画が策定されている学校とそうでない学校では、担任や児童の取組や意識などにどのような違いが見られるのであろうか。キャリア教育を行う上で重点をおいて指導していることを尋ねた担任調査の項目とふだんの生活について尋ねた児童調査の項目を用いて分析した。

1) 全体計画が担任の取組を促進する（学校調査、学級担任調査より）

学校調査において、全体計画がある学校は 63.4%、全体計画がない学校は 36.6%であった。全体計画がある学校の担任と、全体計画がない学校の担任とによって、重点をおいて指導している内容がどう異なるかを比較した(図 1)。全体計画がある学校の担任の方が、全ての項目において「よく指導している」割合が高く、取組が充実する傾向にある。

「よく指導している」割合に 5 ポイント以上の差が見られた項目をあげると、12 項目のうち 7 項目が該当し、「様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事」(5.0 ポイント差)、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする」(10.0 ポイント差)、「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」(5.1 ポイント差)、「喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとすること」(10.7 ポイント差)、「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとすること」(10.0 ポイント差)、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」(8.8 ポイント差)、「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」(5.6 ポイント差)に差が見られた。

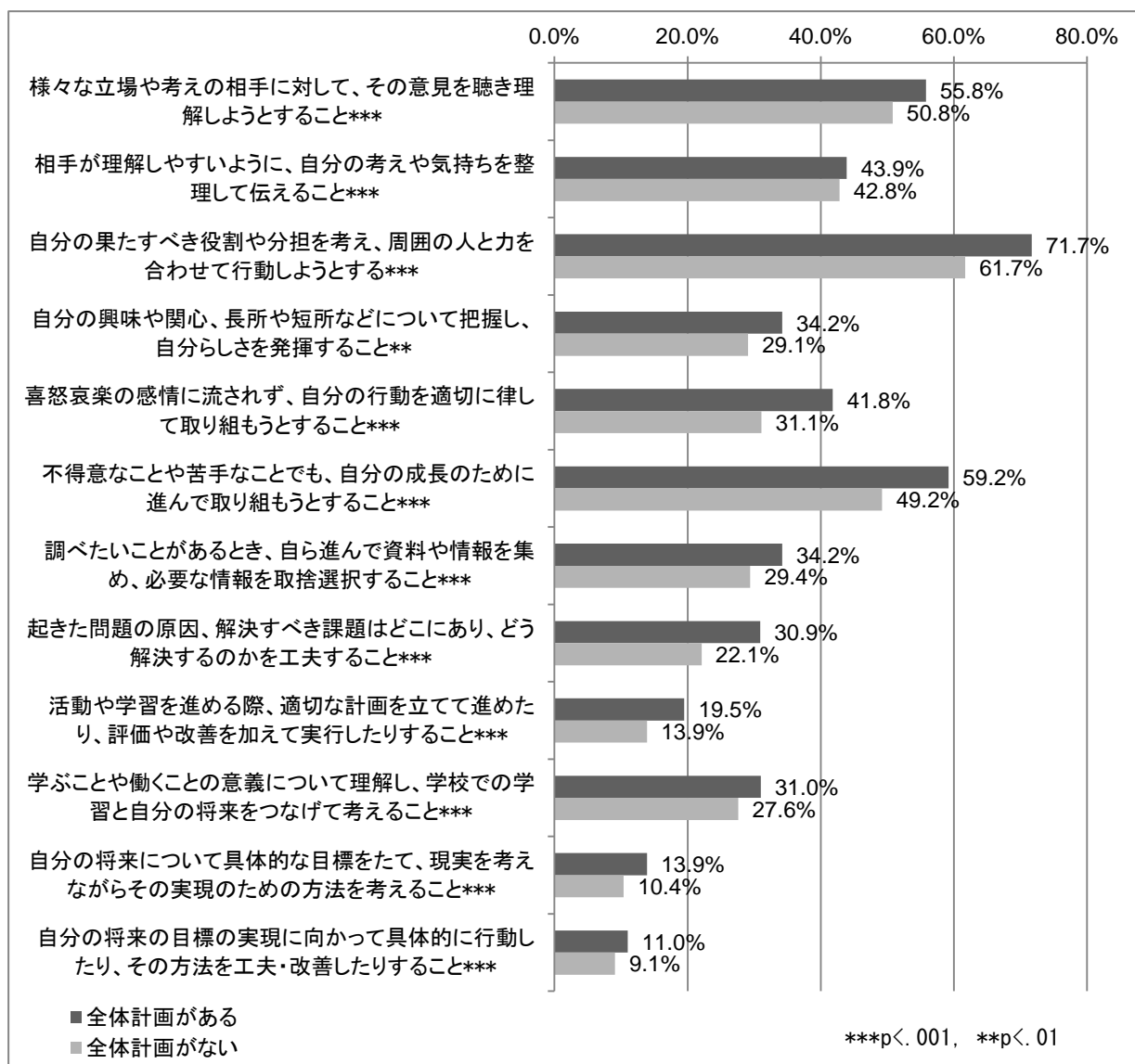
以上のように、担任の取組に大きな違いが見られ、改めて全体計画の重要性が示された。全体計画は単なる形式ではなく、実質的な機能を果たしている。引き続き、全体計画を設定することによって、担任の取組を促進していくことが重要であろう。

2) 重点目標が児童の意識やふだんの生活に影響する（学校調査、児童調査より）

次に、全体計画がある学校の児童と、全体計画がない学校の児童とによって、ふだんの生活における意識が異なるかを検討した。児童調査の結果では、回答者のうち、全体計画がある学校の児童が 68.8%、全体計画がない学校の児童が 31.2%であった。

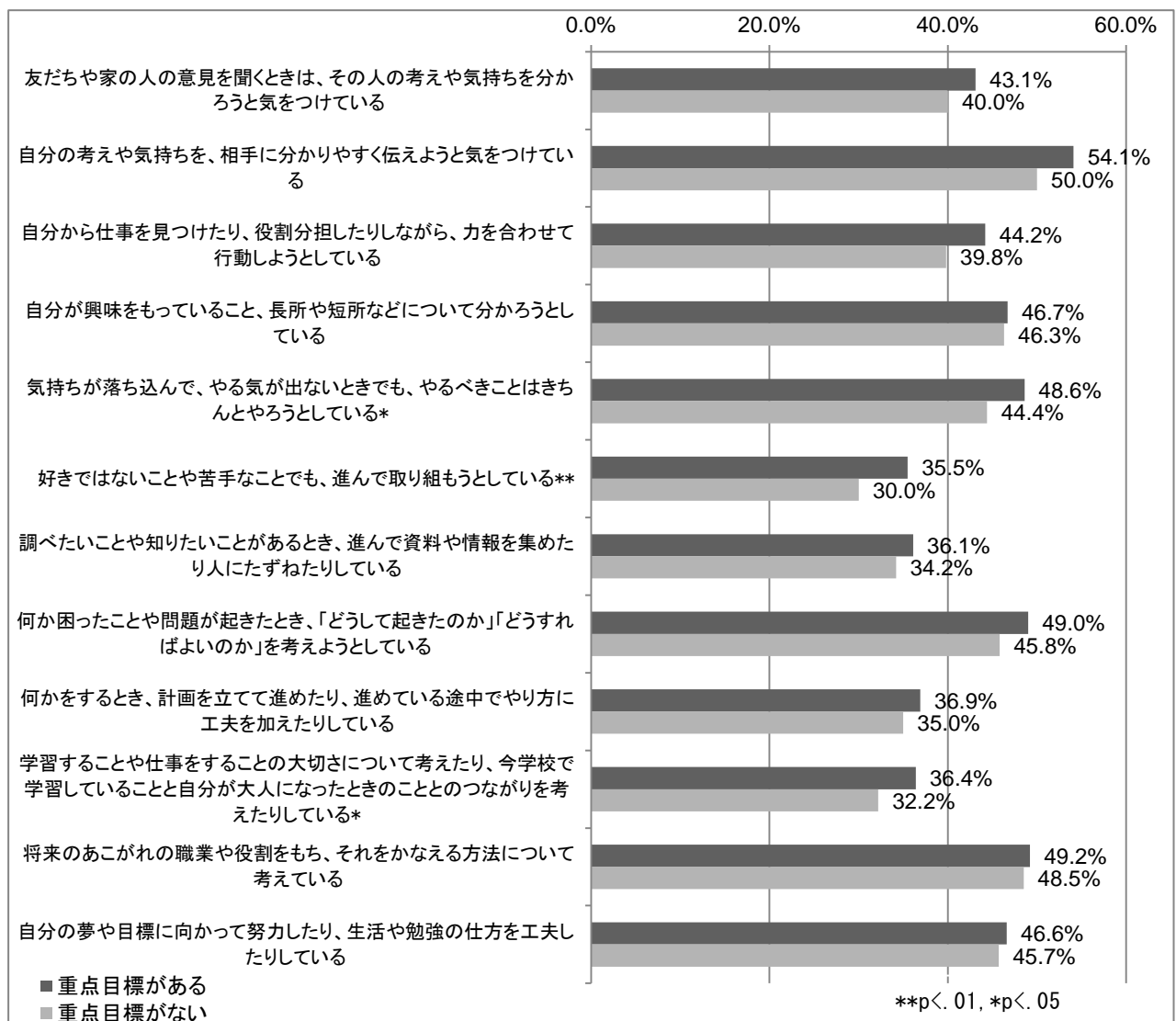
分析の結果、12 項目の全てにおいて、ほとんど差が見られなかった。全体計画の有無によって、担任の取組の違いは見られたが、児童の意識が異なるとまではいえないようである。

【図1】全体計画の有無別に見た担任の取組（学校調査・学級担任調査）



- ※ 回答は「よく指導している」、「ある程度指導している」、「あまり指導していない」、「指導していない」から一つを選択する形式であったが、図では「よく指導している」という回答の割合のみを示した。
- ※ 学校調査において、全体計画がある学校は63.4%、全体計画がない学校は36.6%であるが、担任調査では、全体計画がある学校の担任が63.5%、全体計画がない学校の担任が36.5%であった。
- ※ χ^2 検定の結果、12項目の全てで有意差が認められた。「様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事」($\chi^2(3)=17.763, p<.001$)、「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える事」($\chi^2(3)=15.707, p<.001$)、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする」($\chi^2(3)=27.693, p<.001$)、「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」($\chi^2(3)=13.412, p<.01$)、「喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする事」($\chi^2(3)=31.544, p<.001$)、「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとする事」($\chi^2(3)=27.656, p<.001$)、「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」($\chi^2(3)=17.835, p<.001$)、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」($\chi^2(3)=23.597, p<.001$)、「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」($\chi^2(3)=18.019, p<.001$)、「学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考える事」($\chi^2(3)=19.652, p<.001$)、「自分の将来について具体的な目標をたて、現実を考えながらその実現のための方法を考える事」($\chi^2(3)=17.075, p<.001$)、「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」($\chi^2(3)=19.919, p<.001$)であった。

【図2】重点目標の有無別に見た児童の意識（学校調査・児童調査）



※ 回答は「いつもそうしている」、「時々そうしている」、「していない」から一つを選択する形式であったが、図では「いつもそうしている」という回答の割合のみを示した。

※ 児童調査において、重点目標がある学校の児童は55.7%、ない学校の児童は44.3%であった。

※ χ^2 検定の結果、3項目において有意差が認められた。「気持ちが落ち込んで、やる気が出ないときでも、やるべきことはきちんとやろうとしている」($\chi^2(3)=6.708, p<.01$)、「好きではないことや苦手なことでも、進んで取り組もうとしている」($\chi^2(3)=9.569, p<.001$)、「学習することや仕事をする事の大切さについて考えたり、今学校で学習していることと自分が大人になったときのこととのつながりを考えたりしている」($\chi^2(3)=6.116, p<.05$)。

そこで、重点目標がある学校の児童と、重点目標がない学校の児童とで、ふだんの生活における意識がどう異なるかを比較した(図2)。ここでは、「学校課題や重点目標」「キャリア教育の全体目標」「各学年(学年グループ)の重点目標」の三つが全体計画に具体的に示されている学校を「重点目標がある学校」とした。学校調査によれば、重点目標がある学校は64.3%、重点目標がない学校は35.7%であった。

重点目標がある学校の児童の方が、概ね「いつもそうしている」割合が高く、前向きの姿勢である。割合に5ポイント以上の差が見られたのは、「好きではないことや苦手なこと

でも、進んで取り組もうとしている」(5.5ポイント差)の1項目であったが、この項目を含め3項目で有意差が見られた。

以上の結果から、児童の意識や姿勢に働きかけるには、全体計画を立てることに加えて、重点目標を設定することが大切である。

② 体験活動の効果

職場体験はほとんどの中学校で実施されているなど、体験活動は中学校で最も盛んとなっているが、中学校に限らずキャリア教育において体験活動が有効であるといわれる。それでは、小学校段階の体験活動はどのような効果をもたらすのであろうか。体験活動について尋ねた学校調査の項目と職業への意識について尋ねた児童調査の項目を用いて分析を行った。

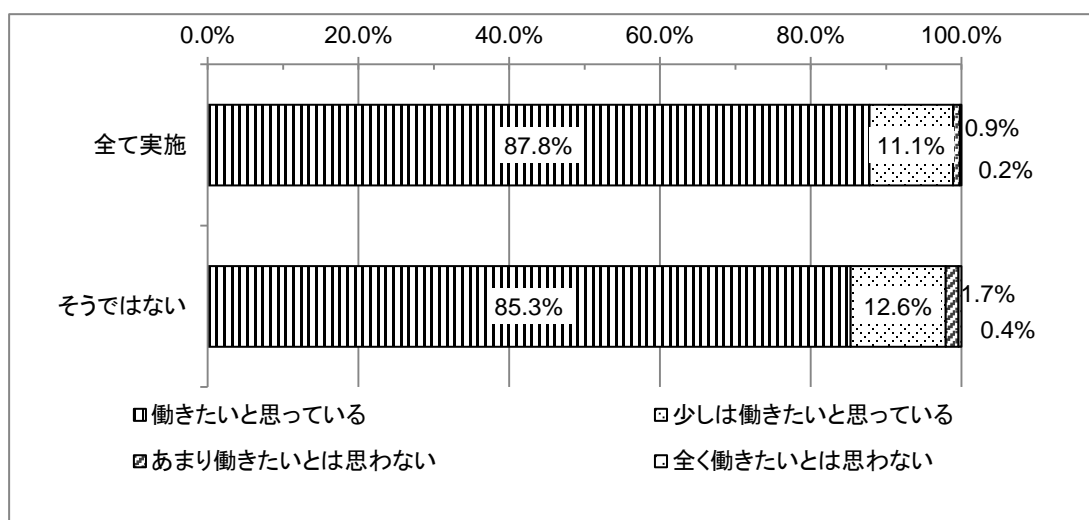
1) 体験活動が児童の職業への意識を高める(学校調査、児童調査より)

体験活動を積極的に行っている学校とそうではない学校では、児童の職業への意識がどう異なるかを比較した(図3)。ここでは、低学年・中学年・高学年という実施時期を問わず、「職場の訪問や見学、職業についての調査活動」、「事業所(企業・福祉施設・公共施設など)における体験学習(職場見学、ボランティア活動を含む)」、「上記の事業所での体験学習に関わる事前・事後学習」の3項目を全て実施している学校を、積極的に体験活動を推進している学校とみなした。これを全て実施している学校は53.2%、そうではない学校は46.8%であった。

「将来、何かの職業について、働きたいと思いますか」という質問への回答をみると、全て実施している学校の児童の方が、「働きたいと思っている」という回答の割合が高く、体験活動によって職業についての動機付けが高められ、「働きたい」という気持ちが高まったと推測される。

なお、「あなたは、将来つきたい職業が決まっていますか」という質問については、体験活動の実施状況による違いは見られなかった。キャリア教育は早期に希望職業を決定することが目的ではなく、小学校段階では職業や働くことに興味をもつことが重要であることを考えると、体験活動は適切な効果をもたらしているといえる。

【図3】体験活動の実施状況別に見た児童の職業への意識（学校調査・児童調査）



※ 「将来、何かの職業について、働きたいと思いますか」という質問に対する回答を示した。

※ 児童調査において、「職場の訪問や見学、職業についての調査活動」「事業所における体験学習」「上記の事業所での体験学習に関わる事前・事後学習」を全て実施している学校の児童が 54.1%、そうではない学校の児童が 45.9%であった。

※ χ^2 検定の結果、有意差が認められた ($\chi^2(3)=9.738, p<.05$)。

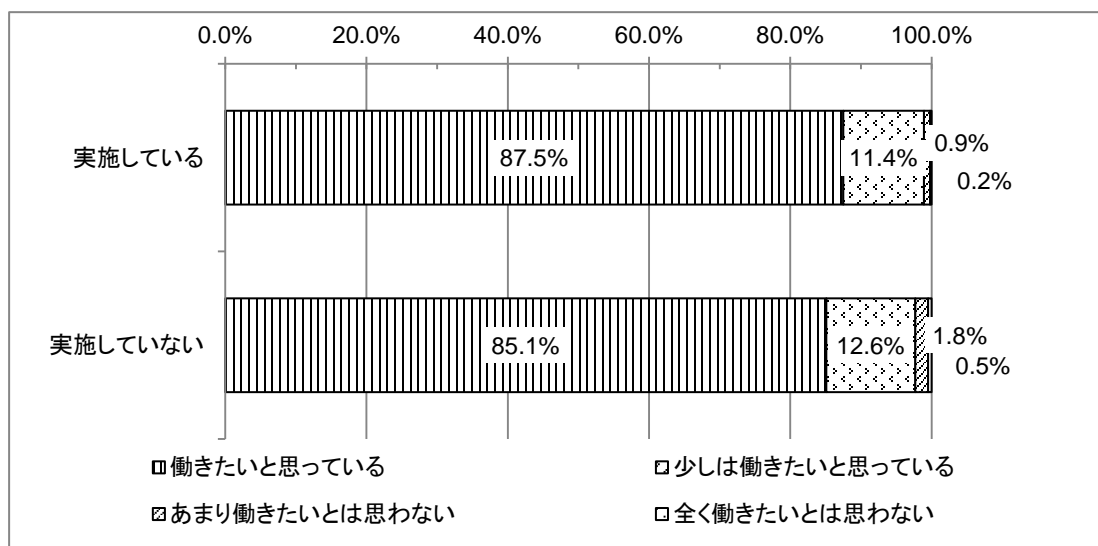
2) 事前・事後学習によって児童の職業への意識が高まる（学校調査、児童調査より）

では、三つの体験活動のうち、どの活動が児童の職業への意識に影響するのであろうか。前項では3項目の全てを実施している学校とそうではない学校で比較を行ったが、ここでは、それぞれの活動ごとに児童の職業への意識の違いが見られるかを検討した。

実施の有無によって児童の職業への意識に違いがあったのは、「事前・事後学習」のみであった(図4)。事前・事後学習を実施している学校は 63.0%、実施していない学校は 37.0%であり、この実施状況別に「将来、何かの職業について、働きたいと思いますか」という質問の回答をみると、事前・事後学習を実施している学校の児童の方が「働きたいと思っている」という回答の割合が高い。5ポイント以上の差は見られないが、有意差が認められた。一方、他の2項目「訪問・見学、職業調査」と「事業所における体験学習」については、活動の実施状況別にみても、児童の職業への意識には違いが見られなかった。

以上の点は重要である。つまり、体験学習を単発的に実施してもあまり効果がなく、事前・事後学習の流れの中に位置付けたときに、体験学習は効果をもたらすといえる。

【図4】事前・事後学習の実施状況別に見た児童の職業への意識（学校調査・児童調査）



※ 「将来、何かの職業について、働きたいと思いますか」という質問に対する回答を示した。

※ 児童調査でみると、事前・事後学習を実施している学校の児童が62.1%、実施していない学校の児童が37.9%であった。

※ χ^2 検定の結果、有意差が認められた ($\chi^2(3)=11.543, p<.01$)。

③ 学習意欲向上の要因

今日、学習意欲の向上が大きな課題である。学習意欲に対しては様々なアプローチが可能であり、キャリア教育を通じた学習意欲の向上も期待される場所である。それでは、キャリア教育のどのような取組が学習意欲の向上につながるのであろうか。

学校調査、担任調査、児童調査の結果を総合し、担任が重点をおいて指導している内容と学習意欲の向上との関連を分析した。

1) 学習意欲向上のとらえ方（学校調査、学級担任調査、児童調査より）

児童調査では、学習意欲の向上に関して、児童に直接尋ねる質問項目は設けられていない。そこで、学校調査と担任調査の結果を組み合わせ、学習意欲向上の有無を設定した。

学校調査における「キャリア教育の実践によって、学習全般に対する児童の意欲が向上してきている」という質問の回答をみると、これに該当する学校は24.2%であった。また、担任調査における「児童は、キャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」という質問に対しては、該当する担任が28.1%であった。

これらの回答と児童調査を関連付けると、学習意欲の向上を認識している学校の児童は32.0%であり、担任が学習意欲の向上を認識している学校の児童は28.1%であった。このいずれかに該当する児童を「学習意欲の向上あり」(48.7%)とし、いずれにも該当しない児童を「学習意欲の向上なし」(51.3%)とした。つまり、学校（管理職）又は担任が学習意欲の向上を認識している学校の児童を「学習意欲の向上あり」、学校（管理職）も担任も学習意欲の向上を認識していない学校の児童を「学習意欲の向上なし」とした。

2) 担任の積極的な指導が児童の学習意欲を高める（学級担任調査より）

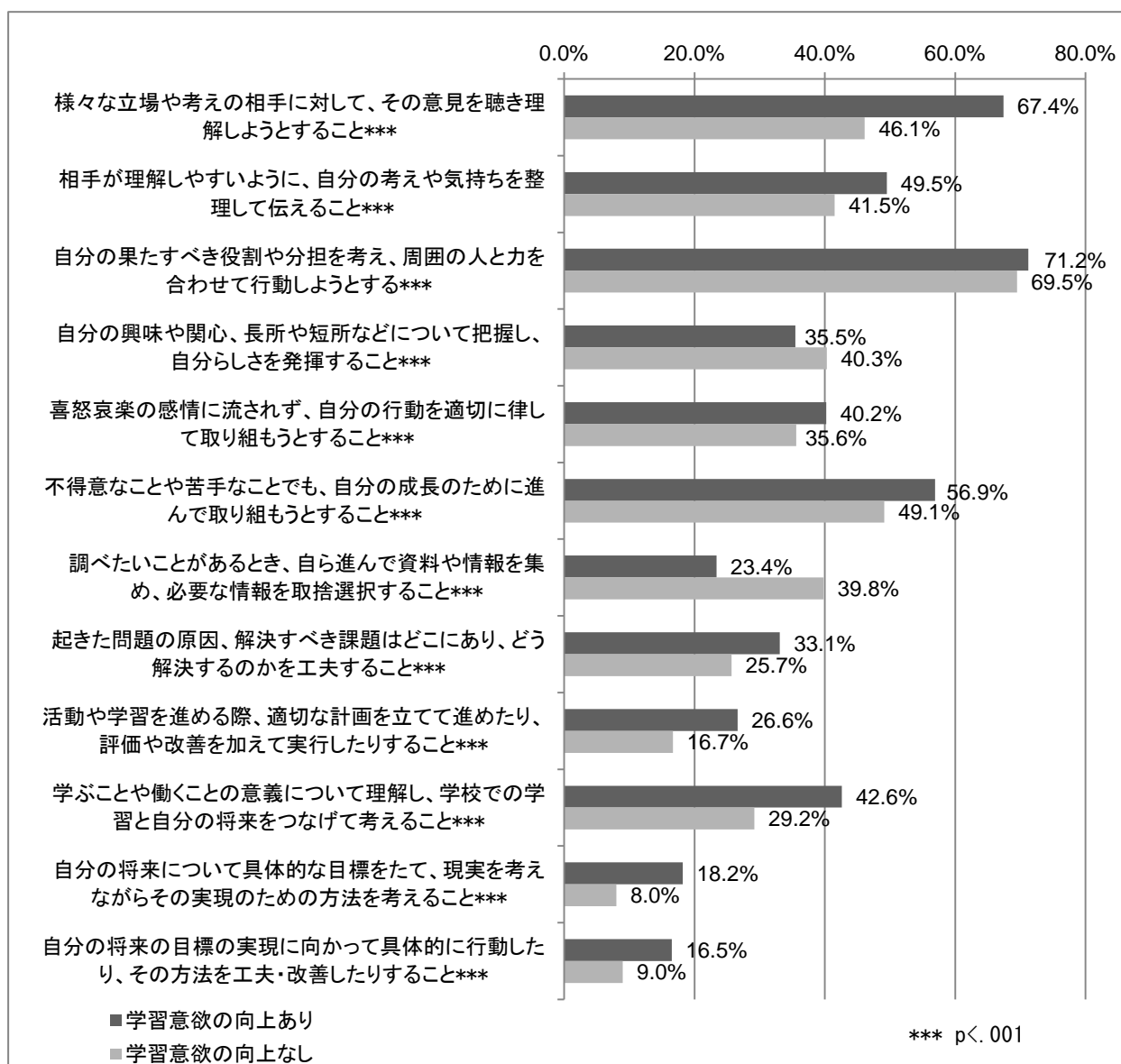
キャリア教育のどのような取組が学習意欲の向上に関連するのかを検討するために、学習意欲向上の有無別に重点をおいて指導している内容を比較した（図 5）。「学習意欲の向上あり」に該当する学校の担任の方が「よく指導している」割合が高い項目が 10 項目、一方、「学習意欲の向上なし」の学校の担任の方が「よく指導している」割合が高い項目は 2 項目であり、充実したキャリア教育が学習意欲の向上につながるものと思われる。

「よく指導している」割合に 5 ポイント以上の差が見られた項目は 9 項目ある。このうち、8 項目は「学習意欲の向上あり」の方が「よく指導している」割合が高く、担任の積極的な指導が児童の学習意欲を高めている可能性がある。なお、該当する項目は「様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事」（21.3 ポイント差）、「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える事」（8.0 ポイント差）、「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとすること」（7.8 ポイント差）、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するかを工夫すること」（7.4 ポイント差）、「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」（9.9 ポイント差）、「学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」（13.4 ポイント差）、「自分の将来について具体的な目標をたて、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」（10.2 ポイント差）、「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」（7.5 ポイント差）となっている。

一方、逆に「学習意欲の向上なし」の方が「よく指導している」割合が高い項目も見られた。担任が「よく指導している」結果として学習意欲が向上した可能性がある一方で、担任が児童の学習意欲の低さを認識しているからこそ、これを高めるために「よく指導している」とも考えられる。なお、該当するのは「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」（16.4 ポイント差）であった。今後の経過次第によっては、学習意欲の向上につながる可能性もある。

以上のように、基本的には担任が「よく指導している」ことにより、児童に変化が生じ、それを学校（管理職）や担任も、学習意欲の向上として認識していると推測される。

【図5】学習意欲向上の有無別に見た担任の取組（学級担任調査）



※ 回答は「よく指導している」、「ある程度指導している」、「あまり指導していない」、「指導していない」から一つを選択する形式であったが、図では「よく指導している」という回答の割合のみを示した。

※ χ^2 検定の結果、12項目の全てで有意差が認められた。「様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする」($\chi^2(3)=277.500, p<.001$)、「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える」($\chi^2(3)=114.929, p<.001$)、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする」($\chi^2(3)=122.828, p<.001$)、「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」($\chi^2(3)=38.014, p<.001$)、「喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする」($\chi^2(3)=39.986, p<.001$)、「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとする」($\chi^2(3)=64.386, p<.001$)、「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」($\chi^2(3)=189.936, p<.001$)、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」($\chi^2(3)=37.148, p<.001$)、「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」($\chi^2(3)=69.597, p<.001$)、「学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」($\chi^2(3)=90.171, p<.001$)、「自分の将来について具体的な目標をたて、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」($\chi^2(3)=142.374, p<.001$)、「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」($\chi^2(3)=155.925, p<.001$)であった。

④ 親子の関わり

キャリア教育を進めていくには、児童の成長・発達を支え、自立を促す重要な場である家庭との連携が不可欠であるといわれる。ここでは、保護者調査と児童調査の結果を用いて、親子の関わりによって、児童のふだんの生活における意識がどのように異なるかを検討した。

1) 親子の関わりが基礎的・汎用的能力に影響する（保護者調査、児童調査より）

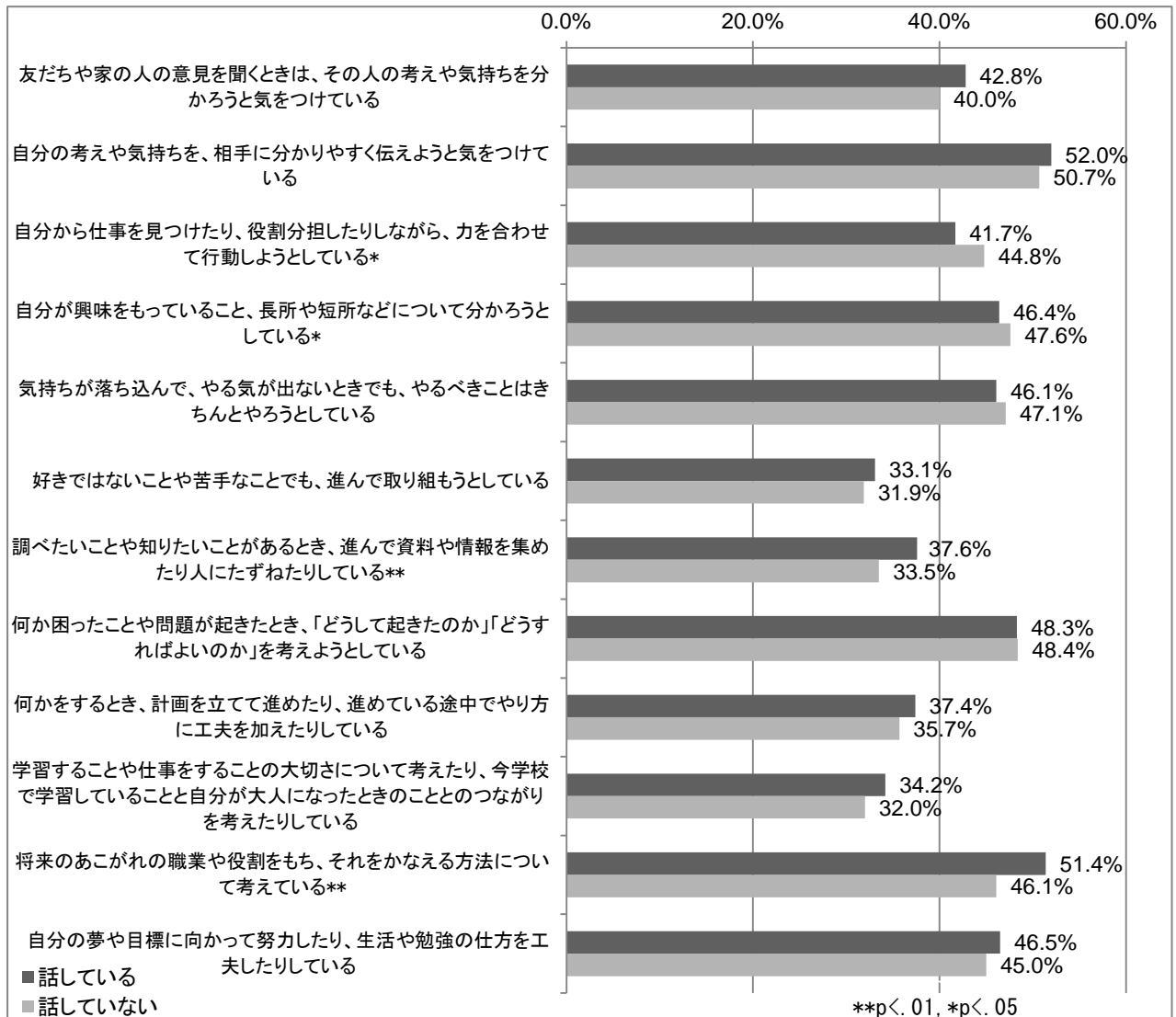
親子の会話はどれほど児童の意識に影響するだろうか。まず、親子の会話の程度によって、ふだんの生活における児童の意識が異なるかを比較した（図 6）。「将来の生き方や進路について、お子さんとどの程度話し合っていますか」という質問への保護者の回答は、「よく話し合っている」（12.4%）、「ときどき話し合っている」（61.8%）を合わせて「話している」（74.2%）とした。また、「あまり話し合っていない」（20.9%）と「ほとんど話し合っていない」（4.9%）を合わせて「話していない」（25.8%）とした。

親子で「話している」方が「いつもそうしている」割合が高い項目と、「話していない」方が「いつもそうしている」割合が高い項目とが混在しており、親子の会話が様々な影響をもたらしていることがみてとれる。5ポイント以上の差が見られたのは、「将来のあこがれの職業や役割をもち、それをかなえる方法について考えている」（5.3ポイント差）の1項目のみであったが、この項目を含め、4項目で有意差が見られた。

「話している」方が「いつもそうしている」割合が高いのは「調べたいことや知りたいことがあるとき、進んで資料や情報を集めたり人にたずねたりしている」、「将来のあこがれの職業や役割をもち、それをかなえる方法について考えている」の2項目であった。ふだんから親子のコミュニケーションをとっていることから、資料・情報集めや人に尋ねるといった、外部志向が生まれるものと思われる。一方、「話していない」方が「いつもそうしている」割合が高いのは「自分から仕事を見つけたり、役割分担したりしながら、力を合わせて行動しようとしている」、「自分が興味をもっていること、長所や短所などについて分かろうとしている」の2項目であった。親子のコミュニケーションが相対的に少ないことからかえって児童が自律的になり、自分の興味関心や長所・短所の理解などの、内部志向が生じるものと考えられる。

「話している」方が児童を育む場合や、「話していない」方が児童の自立を促す場合があるようだが、いずれにしても親子の関わり方が基礎的・汎用的能力に関連する児童の意識に影響することは間違いなさそうである。

【図6】親子の会話の程度別に見た児童の意識（保護者調査・児童調査）



※ 回答は「いつもそうしている」、「時々そうしている」、「していない」から一つを選択する形式であったが、図では「いつもそうしている」という回答の割合のみを示した。

※ 児童調査においては、「話している」67.9%、「話していない」32.1%であった。

※ χ^2 検定の結果、4項目において有意差が認められた。「自分から仕事を見つれたり、役割分担したりしながら、力を合わせて行動しようとしている」($\chi^2(2)=6.399, p<.05$)、「自分が興味をもっていること、長所や短所などについて分かろうとしている」($\chi^2(2)=6.639, p<.05$)、「調べたいことや知りたいことがあるとき、進んで資料や情報を集めたり人にたずねたりしている」($\chi^2(2)=12.640, p<.01$)、「将来のあこがれの職業や役割をもち、それをかなえる方法について考えている」($\chi^2(2)=11.173, p<.01$)。

2) 家庭との連携は教育効果を高める可能性をもつ（保護者調査、児童調査より）

それでは会話の内容によって、児童のふだんの生活がどのように異なるのだろうか。ここでは、親子の会話の内容について尋ねた保護者調査の10項目の質問を用いて、「話している」、「話していない」という回答により、ふだんの生活における児童の意識がどのように異なるかを比較した。

注目されるのは、「今後、家庭や学校でみんなと生活するうえで大切な心構えなど」という会話内容である（図7）。これを「話している」か「話していない」かによって、児童

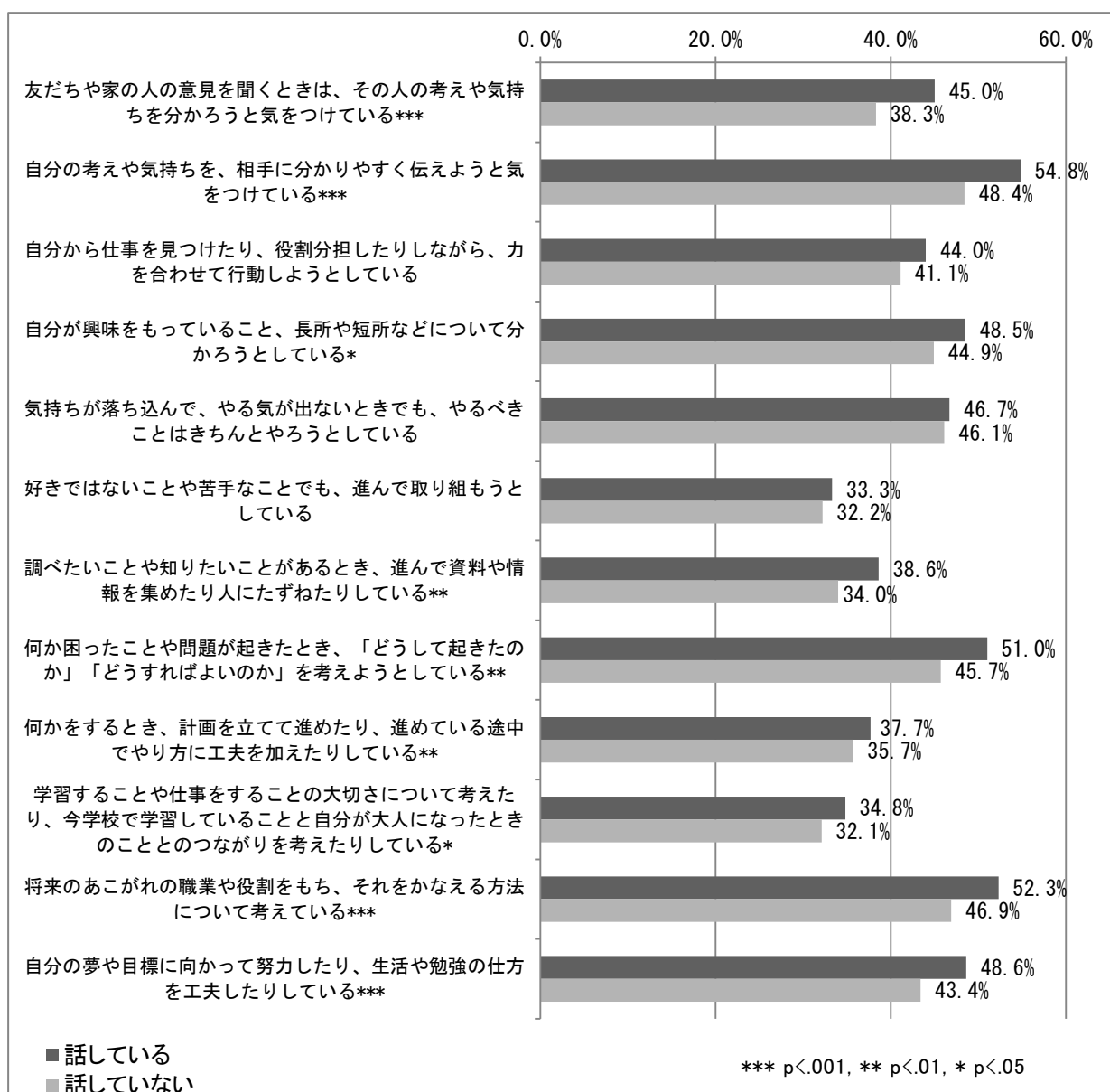
の意識に関する 12 項目中 9 項目で有意な関連が見られた。いずれも、「話している」親子の方が、児童が「そうしている」割合は高かった。児童の意識を高める影響がかなり明確に認められる項目、つまり 5 ポイント以上の差が見られた項目は、「友だちや家の人の意見を聞くときは、その人の考えや気持ちを分かろうと気をつけている」(6.7 ポイント差)、「自分の考えや気持ちを、相手に分かりやすく伝えようと気をつけている」(6.4 ポイント差)、「何か困ったことや問題が起きたとき、「どうして起きたのか」、「どうすればよいのか」を考えようとしている」(5.3 ポイント差)、「将来のあこがれの職業や役割をもち、それをかなえる方法について考えている」(5.4 ポイント差)、「自分の夢や目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしている」(5.2 ポイント差) の 5 つであった。「今後、家庭や学校でみんなと生活するうえで大切な心構えなど」という項目は、人間関係形成・社会形成能力そのものと関連する内容であるが、この会話によって、児童の人間関係形成・社会形成能力や自己理解・自己管理能力などが涵養されるものと推測される。

一方、会話の内容に関する他の 9 項目のうち、「中学校、高等学校、大学など上級学校のことや様々な職業のこと」、「保護者ご自身の歩んできた人生やそこから得た教訓」、「将来に向けた勉強の大切さ」、「お子さんが憧れている将来の職業」、「今日の社会で起きている様々な問題」の 5 項目において、児童の意識との間に有意な関連が認められた。しかし、必ずしも親子で「話している」方が、児童の「いつもそうしている」割合が高いとは限らず、会話が及ぼす影響は多様なようである。

以上の結果から、親子で話すことが良い話題や、逆に話さないことが良い話題といった判別を行うことは適切ではない。しかし、少なくとも今回の結果からみる限り、「今後、家庭や学校でみんなと生活するうえで大切な心構えなど」については、親子で話すことによって児童の意識を高め、基礎的・汎用的能力を高める可能性が示唆された。

キャリア教育は学校だけが担うものではなく、家庭や地域と連携した取組の必要性が指摘されている。今回のデータは、その有効性を示している。家庭との連携によって、キャリア教育の効果を一層高めることが期待される。

【図7】会話の内容別に見た児童の意識（保護者調査・児童調査）



※ 「今後、家庭や学校でみんなと生活するうえで大切な心構えなど」を「話している」か「話していない」かによって、児童の意識がどのように異なるかを示した。児童の回答は「いつもそうしている」「時々そうしている」「していない」から一つを選択する形式であったが、図では「いつもそうしている」という回答の割合のみを示した。

※ χ^2 検定の結果、9項目において有意差が認められた。「友だちや家の人の意見を聞くときは、その人の考えや気持ちを分かろうと気をつけている」($\chi^2(2)=23.261, p<.001$)、「自分の考えや気持ちを、相手に分かりやすく伝えようとしている」($\chi^2(2)=20.055, p<.001$)、「自分が興味をもっていること、長所や短所などについて分かろうとしている」($\chi^2(2)=6.045, p<.05$)、「調べたいことや知りたいことがあるとき、進んで資料や情報を集めたり人にたずねたりしている」($\chi^2(2)=10.106, p<.01$)、「何か困ったことや問題が起きたとき、「どうして起きたのか」「どうすればよいのか」を考えようとしている」($\chi^2(2)=12.139, p<.01$)、「何かをするとき、計画を立てて進めたり、進めている途中でやり方に工夫を加えたりしている」($\chi^2(2)=9.165, p<.01$)、「学習することや仕事をする事の大切さについて考えたり、今学校で学習していることと自分が大人になったときのこととのつながりを考えたりしている」($\chi^2(2)=8.486, p<.05$)、「将来のあこがれの職業や役割をもち、それをかなえる方法について考えている」($\chi^2(2)=19.183, p<.001$)、「自分の夢や目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしている」($\chi^2(2)=18.926, p<.001$)。

⑤ まとめ

改めて全体をまとめると、今回の分析結果は、小学校におけるキャリア教育が機能してきたこと、そして更に一層の推進が計られることは重要であることを示している。特に重点目標を考慮しながら全体計画を策定し、教員の取組を促すことが求められる。担任の積極的な指導は、児童の学習意欲を高めている可能性があるだけに、計画内の重点目標策定は極めて大切なポイントとなってくる。また、体験活動を積極的に推進しつつ、より一層有効なものとするために、事前・事後指導を整備することが重要である。そして、親子で話すことが児童の意識を高め、基礎的・汎用的能力を高める可能性があることから、家庭との連携は今後ますます重視されるポイントになる。

各学校においては、これまでのキャリア教育実践を基盤としつつも、全体計画・重点目標の策定や事前・事後指導といった制度の整備や、教員の取組の促進や家庭との連携を進め、児童の学びを促していくことが求められる（児童の学習意欲向上については、小学校（3）P40も参照のこと）。

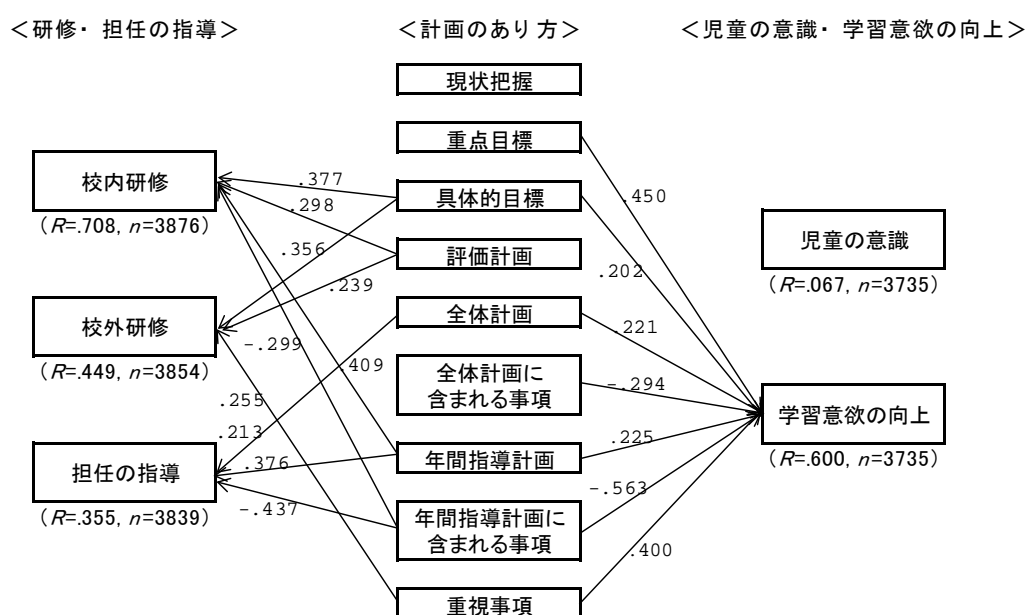
(3) 学習意欲（向上）との関連（小学校編）

小学校においては、キャリア教育に関する全体計画と年間指導計画があり、計画立案の際に重視した事項が多く、計画内に重点目標・具体的目標が設定されると、児童の学習意欲の向上につながる（図1）。特に重点目標の設定については、学習意欲の向上に対する影響がかなり大きい（図1、附表参照P127）。ただし、立案時に多くの事柄に留意しながら計画することは有効だが、全体計画・年間指導計画そのものに多くの事項を盛り込むことは、必ずしも成果をあげる上で有効ではない。特に、年間指導計画に含まれる事項が増え過ぎることで児童の学習意欲に与えるマイナスの効果は大きい。つまり、キャリア教育の計画には、様々なことを考慮しつつも、いたずらに多くの事項を盛り込むのではなく、重点目標を絞って具体的目標を明確にすることが重要である。その上で積極的に実践を行うことが、児童の学習意欲を高めることにつながると考えられる。

なお、キャリア教育の計画は、研修や指導内容に対しても影響する。具体的目標が設定されると、校内研修が盛んに実施され、校外研修への派遣も積極的に行われるようになる。他方で、年間指導計画に含まれる事項が増えれば増えるほど、逆に校内研修の種類が乏しくなり、担任が重点を置いて指導することも減ってくる。つまり、目標の絞り込みは能力開発や教員の活発な活動につながり、その結果、児童の学習意欲の向上にもつながっていくものと考えられる。

各地域・各校の実態を踏まえ、焦点化した目標設定を行い、全体的な計画としては調和と段階を大切に「やみくもにがんばらない」デザインが児童の学力向上に結び付くことを肝に銘じたい。

【図1】計画のあり方と研修・担任の指導が学習意欲の向上に及ぼす効果



※パス解析において、有意な標準化係数βのうち、値が.200以上のものを図示した。なお、ステップワイズによる重回帰分析を繰り返した。図や分析結果の詳細については附表欄を参照してほしい。